2025・1号

直江の津

55号
終刊号

◉インタビュー◉

なおえつ信金倶楽部の発足と当時の社会状況を振り返る

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

◉「直江の津」で見てきたもの◉

「景色」から過去・現在・未来を見渡す

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

私の直江津

上野聡美

歴史は「今日」への手紙

「但馬・米屋甚助出世譚」と泉蔵院の船絵馬

わたしの直江津

上野聡美

まず初めに、このような巻頭エッセイを書かせていただけること、とても光栄に思っております。今回で直江の津が最終号だとお聞きし、私でいいのかと恐れ多い気持ちでいっぱいですが、上越で暮らす二四歳のわたしにとっての直江津についてお話しできればと思います。

上越で生まれ、小・中・高と上越で育った私ですが、そんな私にとっての直江津は正直なところ物凄く思い入れがあるかと言われるとそんなこともないような場所でした。小学生の頃は校区外の隣町という認識で、時々家族と遊びに行ったような記憶が薄っすらとあります。中学高校では、直江津の学校に進学し六年間直江津に通学していましたが、特段直江津の歴史文化に触れる機会もなく卒業し、大学進学を機に富山県へと移り住みました。他県に移り住み、出身の異なる集団に属すことで、上越出身ということが自分のアイデンティティの一つであると発見できたように思います。また、大学では芸術系の学部に入学し、授業の中で地元の分析やアートプロジェクトなどによる地域活性化の事例に触れることで上越への愛着や思い入れが生まれ、地域活性化の活動に興味を持ち始めました。

そんな私が直江津に興味を持ち、深く関わるようになったきっかけは「なおえつうみまちアート」でした。うみまちアートを知ったのは本当に偶然で、ＳＮＳで開催についての記事を見かけたことがきっかけでした。上越でアートプロジェクトを開催することに物珍しさを感じましたし、コロナ禍で自粛ムードのなか参加できるイベントという点に興味を惹かれ、作品制作ボランティアに参加しました。これがきっかけで、卒業論文の事例としてうみまちアートを取り上げ、卒業後は地元企業の頸城自動車株式会社に就職しました。就職後も、二年連続で事務局としてうみまちアートに関わらせていただいています。また、底抜け屋台の一員として直江津祇園祭にも参加させていただき、二〇二四年の夏は私の人生の中で一番直江津に関わった夏となりました。正直、ここまで長く関われるとは直江津に興味を持った当時の私は思ってもいませんでしたが、直江津のためにできることを模索する日々はとても充実感に溢れています。

直江津で活動する中で、直江津のみなさんの地域に対する熱量の高さをとても感じています。直江津に対する思いの大

きさには直江津祇園祭の存在が深く関わっていると思っています。直江津祇園祭によってコミュニティが明確化されていることや地域内共通の話題が生まれることで帰属意識の高さを実現しているのではないかと考えています。このような直江津に対する地域のみなさんの熱量・愛の深さが、私が直江津のために何かしたいと思う理由の一つかもしれません。

直江津の活動に参加させてもらい、直江津の活性化に関わりたいという思いが強くなる一方で、時折、〝直江津について何も知らない〟ことを痛感し葛藤することがあります。身近なはずなのに何も知らない自分がある種コンプレックスなのかもしれません。ただ、知識や経験の差は簡単に埋まるものではないので、何も知らない私だからこそできることを見つけていく必要があります。何も知らないからこそできることの一つが直江津を新鮮に体感できることだと考えています。私自身が直江津の魅力をより深く体感することで直江津をより知っていき、その中で昔から直江津に馴染みのある人にとっては当たり前で見落としがちな直江津の魅力を発見していければと思っています。誰かが直江津に興味を持つきっかけになれるように、今後も活動していきます。

私と同世代や私よりも若い世代へ、また、町外・市外・県外へ直江津の輪が広がっていくことを願って。

〝わたしの直江津〟はこれからです。



うえのさとみさん
平成一二年生まれ、上越市出身、上越市在住
春日小学校、直江津中等教育学校、富山大学芸術文化学部卒業
二〇二三年頸城自動車株式会社入社
なおえつうみまちアートをテーマにした卒論は、地域と関わることへの思いがあふれています。

なおえつ信金倶楽部の発足と当時の社会状況を振り返る

出席者　上越なおえつ信金倶楽部代表幹事　小林正夫さん
上越信用金庫理事長　日馬直一（くさま）さん
インタビュー　北越出版　佐藤

―「直江の津」の発行母体である上越なおえつ信金倶楽部（以下・信金倶楽部）が発展的ではありますが、解散することになり、それに伴って「直江の津」も終刊となります。

「直江の津」の編集担当者として、いまさらながらと言われそうですが、信金倶楽部発足の経緯と地域貢献から見えてくる当時の社会状況をお二方にお話しいただいて、〈終刊号〉の中でこれからの地域を考えておこうと思います。

日馬理事長さんから発足当時のお話をお願いします。

なおえつ信金倶楽部の発足と地域状況

日馬　高田信用金庫との合併前ですから（平成一六年、上越信用金庫となる）、直江津信用金庫の外郭団体として平成七年八月二三日に発足しました。発会式は翌年の平成八年三月八日、来賓に荻野周次郎商工会議所会頭を迎え、ホテルセンチュリーイカヤで行われています。

当時の斎京稔理事長の提案で、会員相互の親睦と事業の拡充、発展を図り地域経済の向上に寄与することを目的として、営業店ごとにある外郭団体「信友会」とは別に、金庫全店の外郭団体ということで、広く会員を募集させていただき一八六名の入会をいただきました。会の発足は新聞等にも取り上げられました。

初代の代表幹事は中川虎三さんです。本会の発会主旨に強いご賛同いただき、長きに渡って代表幹事としてご尽力いただきました。その後、平成二六年三月、荻野順次郎さんに替わりましたが、ご逝去されたことから、二九年三月の総会で小林正夫さんに代表幹事を受けていただきました。

高田・直江津信金の合併後は「上越なおえつ信金倶楽部」に改称し、現在の会員数は八七名。発足時の約半分になっています。

「直江の津」第一号の発行は平成一三年三月です。発

刊までには会発足から四、五年の期間がありますね。

小林　平成七年に直江津信金が七〇周年を迎えるにあたり、社会貢献事業をしようとなったんです。既存の信友会さんは個人が中心ですが、信金というのは経済人の協同組合だから、会員の経済人が社会に経済的な貢献ができるように知識を深めようと、経済同友会的な発想で直江津信金のエリア内で構成したのがなおえつ信金倶楽部です。

その背景というのは、上越は経済交流圏の結節点と言われてきました。それを活用することも踏まえようということなんです。国鉄からＪＲへ、そして将来、第三セクターへという見通しもあった。当時、ほくほく線の特急はくたかで直江津駅の業績は良かったそうです。しかし新幹線が開業すると中心地が移り、直江津駅の拠点性が少なくなってしまう。



左・日馬理事長　右・小林代表幹事

平成七年　ほくほく線開業
在来線最速の特急はくたかが走る
平成一一年　上信越自動車道全通
北陸自動車道全線四車線化
平成二七年　北陸新幹線金沢延伸

それらに対応していくために事前に取り組もうという思いがありまして、その勉強の場、交流の場を作ろうというのが理事長であった斎京さんの発想の原点です。それに応えて、中川虎三さんや商工会議所の副会頭であった高橋信雄さんなどが中心になって会を作ったわけです。私も四〇歳そこそこでしたが、発起人の一人に入っていました。

経済面だけではなく、社会貢献を実際に目に見える形にしなければいけない。

ちょうど介護保険制度が発足（平成一二年四月一日施行）して、介護保険サービスを受けることができる福祉施設、地元住民のためになる福祉施設を作ろうと、翌、平成八年に福祉法人「えちご府中会」を設立し、駅南に「ケアハウス至徳路（しとくじ）」を建設しました。

社会福祉法人の運営は福祉のエキスパートに来ていただいたというわけです。

日馬　小林さんの話を聞くと、当時、ものすごいことをされたんだなと思いますね。なかでもえちご府中会や高齢者福祉事業との繋がりですね。今でこそ行政との連携やタイアップについて盛んに言われますが、考えてみたらうち（信金）は、ずっと前からやっていたんだと。今、金融機関が介護施設を作るなんていったら、全国的なトップニュースになると思います。

―えちご府中会を立ち上げるというのは、その当時としては考えられない発想ではありますが、周りの理解も大



ケアハウス至徳寺

変だったと思います。

日馬　斎京理事長は、私たち金融機関の人間の発想とは全く違う発想を持っていました。というのも、斎京さん以外、信金の役員は全て生え抜きの人ばかりで、非常勤理事をやってはいただいていましたが、どちらかというと金融業と畑違いなところから理事長を受けていただいた。

　私はその頃は一般職なので、すごいことを考えているんだなとは思っていましたが、常勤の役員はちょっと大変だったかもしれませんね（笑）。

日馬　金融機関としてルールのあるなかでよくこれだけのことがやれたなって、今でも思います。

小林　仕組みは単純だと思います。みんなの協賛を得て社会福祉法人の設立に協力して融資するだけですから。信金からの出向者をつのり、事務局に入れ、そして福祉のエキスパートを招いて…。ですからある意味、人材活用できるんです。でも介護事業そのものが未熟であったというか、軌道に乗らなかった。だから先鞭を切ったわけです。

―斎京さんは、よく「金勘定ができないのは俺だけだ」とかって言っていましたけどね（笑）。

　あの頃、小さな福祉事業者が出てきたけれど、頭打ちになっていた時ですね。

小林　そうなんですけれど、市内には自ら介護福祉士の資格を勉強して、異業種から参入して福祉事業を立ち上げた人もいます。

日馬　ですから、えちご府中会ができた当時は、今のような小さな介護施設はほとんどなく、全国的規模の大きなところと公（おおやけ）でやっているようなところしかなかったんです。えちご府中会や企業ができて、何年か後にルールや法律の改定があって、小さな介護施設がたくさんできてきたのが現状かと思います。

小林　業務が細分化されたんですね。

日馬　そうです。それと地元ではそれなりの福祉スタッフの数が少なかったっていうのもありますし、そういう意味では、信金倶楽部の発足もそうでが、今考えてみますと、当時の勢いを感じますね。

―当時、景気としてはまだよかったわけですね…。

小林　かつての余韻が残っている感じでしたね。

日馬　そうですね。バブルみたいなものの余韻ですね。この辺はバブルの恩恵はあまりなかったですが、小林さんおっしゃるように、景気は決して悪くはなかったと思います。

―まだ楽に融資を受けられた時代ですね。それが過ぎ、斎京さんが「佐藤、こんなに景気悪くなったら経済じゃなくて、文化から立て直しせんきゃならんと思うけど、どう思う?」っておっしゃったのをよく覚えています。経済の立て直しに文化という発想も、なるほどと思わせるものがありました。

小林　バブル崩壊とか、失われた一〇年と言われる時代

ですね。

平成一三年（二〇〇一）は、聖域無き構造改革を標榜した小泉政権が誕生、アメリカでは九・一一同時多発テロなど騒然とした世情下にあり、経済もバブル崩壊から一〇年、依然として大型倒産が相次ぎ、完全失業率も五％を記録するなど経済は低迷し、一部には「今は何もしないで、じっと我慢の時代だ」という空気が漂っていた。

「直江の津」という発想

日馬　それが「直江の津」の発刊に繋がるわけですね。会の発足から五年後。

小林　やはり生活というか、経済の裏付けというのは文化ですよね。やはり昔から。

高田には高田文化協会がある。直江津地区にもそういうのはあったのかなあ…。たかしん会（高田信金時代に発足した外郭団体）の主だったメンバーは大体、高田文化協会のメンバーなんですね。直江津地区にもあのような団体があるといいと思っていたんですが。

―旧泉酒店の泉真治さんなどを中心に、昭和二〇年代は文芸活動みたいなのがすごく盛んで、その流れとして直江津にも文化協会らしき組織があったんですが、きっちりとした組織を作るのが、あまり直江津の人は得意じゃないから…。

小林　なるほど。

―「直江の津」の話に戻りますが、そういう文化協会みたいな考え方の中で、八十二銀行文化財団の機関誌「地域文化」と郷土誌の「頚城文化」を「合体したものを佐藤、作れないか」っていうのが始まりだったんです。

小林　そうですか。八十二銀行文化財団は助成金出してますね。（「地域の文化 継承活動助成事業」https://www.82bunka.or.jp/grant/）

日馬　やはりそういう意味では、斎京さんのレベルと私どものレベルが違うのはそこらへんなんだろうなって。

―のと共栄信金（のとしん）、も結構文化活動がありました。「NINJIN」というすごくいい広報誌があります。おそらく広報活動をやる人が専従で…。

日馬　規模が全然違いますけど、糸魚川信用組合さんも会報誌を全戸配布で制作していますね。新聞折込みたいな形で入れていたりして。

小林　あれも大変ですよ（笑）。信組さんの人が専従でやらないとできない仕事ですからね。

―「直江の津」は広報誌とは違い、地域への発信という意味がありましたね。

日馬　私どもの発想とは全然違う発想と柔軟さ。ある意味で強い索引力もありました。

―最終的に五五号まで継続できたのは、母体である上越なおえつ信金倶楽部があったからだと思います。

発刊されても、なかなか理解が広まりませんでしたが、こういう雑誌を何の制約なしに勝手に作らせてもらえた。

小林　一時期、休刊することになった。あの時、急激に会員が減っちゃって、それで、しばらく休刊をお願いしたんですけど、やはり物足りないっていうか、支えがないっていうか。バックボーンがないと、他の事業を組み立てようとしても、外郭団体としての信金倶楽部がもっと存在価値を示すというか…、それでぜひ復刊したいというのが経緯ですよね。

―やはり「直江の津」というタイトルで、なおえつ信金倶楽部ですから、上越なおえつ信金倶楽部なると、何か

イメージの違いみたいなのがあって、復刊する時は、もっと広いエリアを取り上げましょうということになった。

小林　信金そのものもエリアが合併して広くなったけど、格になるコアは、古くから交通の結節点。やはり直江津なんですね。

―ええ、その垣根を取り払って、五年の間を置いて復刊されました。

小林　上越なんだし、それを広げてやるだけの話だけですよね、謙信公の時代はもっと広かったわけですから。

日馬　全くその通りですね。

地域経済の状況

―今のこの地域の経済はどんな状況なんでしょうか。

日馬　人口は統計的にもこの一〇年ぐらいで相当減っていますが、世帯数は減っていないんです。上越市は広域合併で中山間地の方々は、真ん中に出てきてアパートなどに住む若い方々の世帯があったりするわけです。ですから人口は減っているんですが世帯は減っていない状況なんです。

「はれまちショッピングセンター」に、一店舗（はれまち支店）あるのですが、そこも日に日に景色が変わるほど、まだ建物が建てられています。本来ならこの辺の地域のアパートは飽和状態だったんじゃないかなと思うんですけど、一般のお家が櫛の歯が欠けるように抜けていっても、小規模なアパートは建っているというような現状です。

事業所に関しては、大幅ではありませんが減ってはいます。それよりも後継者がいらっしゃらない。この先、事業をどうしようかと思い悩んでおられる事業主が相当数いらっしゃいます。ともすると、この先、ご不幸にならないような形でM&Aや廃業、事業譲渡だとか、そういうお話が出てくると、一気に加速して事業数が減ってくる可能性はあります。

私どもは両信金の合併当時から比べて、ご融資がある事業先数が減っているわけですが、今ほど申したようにこれからもっと加速して減ってくる可能性があります。そのなかでも各営業店、営業店舗長には新しい融資取引先、これから創業される企業にお客さんになっていただく努力をしていますが、全体的に事業先数が減っていくのはやむを得ないでしょうね。

―経済が悪いというより、後継者がいなくてやめるだけではなく、仕入れ先が廃業したから、こちらもダメだというのも最近聞きますね。

日馬　確かにコロナ禍前に業績が戻ったという取引先も多いんですが、売り上げが戻ったとしても、仕入れ値が上がってきておりまして、本来はそれを価格転嫁してコロナ前よりも売り上げを何％か増しにしなくちゃいけないんですけど、それができていない。ですから、ようやく売り上げはコロナ前に戻っても、コストがそれ以上にかかっている。売り上げが上がっても利益が下がっているっていうような取引先さんが大半でいらっしゃいます。

―悪循環ですよね。かといって賃金が上がったからといって消費が伸びるかというと全く伸びていませんし。

働き手はどうでしょうか。

小林　これは日本全国の話でもありますが、働き手の人数もそうですが、地元で働きたいという人もいるんですがミスマッチが多いですね。例えば、日頃のリフォームとかリノベーションなどのような細かい仕事はたくさんあるんです。人の役立つ仕事、便利屋さんですね。繁盛

しているようですが、そういうのに取り組もうという若い人たちが少ない。そういう方がいらっしゃれば起業もできるだろうし、福祉だって介護士にこれからなろうという人が非常に少ないですよね。

大工場は外国の方たちの戦力がとても大きいことが一般市民には見えていない。そういう人たちが地域へ出て来れないというか、そういう環境が整っていない。

日馬　この地域で就労されてる外国人の数はここ数年の間に相当増えています。今みたいな円安の状況ですと、来ても稼ぎが少なくなっちゃいますので、ちょっと落ち着いた感もありますが…。ですが外国人の口座数はまだ減ってはいません。ただ問題なのは、就業している間の口座がそのままになっている方もいるんです。それが今、政府が警戒しているマネ・ロン&テロ（マネー・ロンダリングとテロ資金）に、そういう口座に使われている可能性もありますから、徹底的に金融機関で管理するようにという強いルール改正が行われております。

小林さんがおっしゃったように、この先、日本人だけで賄いきれないような業種に、外国人の力を借りないといけないような環境になってくる可能性は少なくないと思います。

―これだけの人口減だと、ここで職業について生活してもらうためには、ここで住み暮らしても大丈夫だよという支援、住宅支援などの色々な支援がないと。


小林代表幹事

小林　そうですね、市民と季節労働者的な臨時的な人たちの、いわゆる壁がありますよね。

日馬　今、工業団地にある電機メーカーさんの近くにアパートがものすごく建っているんです。小学校も海外から働きに来ている皆さんの子どもさんが多いそうです。

就労条件や考え方で、自国との慣習や文化の違いの中で地域の皆さんとの関係性にも苦慮されているのではないかと思われます。

―そういうものが目に見えない形で出ているんですね。

地域全般のことや観光について

―四年前、直江津ショッピングセンター―にオープンした無印良品は、地域にインパクトを与えたと思いますが。

日馬　やはり無印良品のような方々は、いろんな意味で、この辺にはない発想がありますね。オープン当時、日本とか世界と言われるような店舗を開店させる発想。

金井会長さんのお話（信金倶楽部講演会＝「直江の津」五三号に掲載）は今でも思い出しますけれど、「公益人本主義経営」というのは、ちょっと難しい話でした。

―金井会長のお話は三回ほど聞きましたけど、お話は一貫しているんですが、一番難しかったのが信金倶楽部（笑）。

小林　なるほど、そうですか（笑）

盛りだくさんだったですからね。なんていうのか、ご自身の考え方に対するいろんな面からのアプローチを一緒に喋りましたからね。無印良品の経営方針の基本を話していただいたということですね。


日馬理事長

昔、ナルスがやっていたような無印良品の移動販売バス「MUJI to GO」。あれは地域には貢献していると思います。三八市にも出店していますし、地域へ積極的に出ていますね。

―観光面からの地域資源についてお聞きします。

小林　カーフェリーの「あかね」は残念だったなと思いますね。双胴型高速カーフェリーで、ああいう目玉がないと…。有明海行くと熊本と長崎の間をしょっちゅう運行しているんだけど、ちょっと日本海はそういうわけにはいかないんですね。無理らしいですね。揺れる。それも縦揺れ。

―それが嫌で、わざわざ新潟へ回って渡ったなんていう話は結構あるみたいですからね。今度の船はちょっと小さい。

小林　そうですよね。トキもありますし、佐渡金山が世界遺産に登録されたのは大きいから直江津としてはなんとか活かしたいですね。

―外から観光で来られる方は、小木港へ上がって両津から新潟に回って帰ってもいいですけど、地元の人たちがで行ったり来たりするのはね。佐渡の方は泊まらないと帰れないんですよね。

小林　それは特急「しらゆき」も一緒で、新潟と四往復だけれど、結局、午前中二回なんですね。朝、帰ってこられないとか、夕方、帰ってこられるけど、こっちから行けないとか。すごく便が悪い。一方通行の便になってるから、観光やビジネスのこと考えるとそういうところは課題ですよね。

日馬　先ほどの佐渡をはじめとした観光に関しては、私もコンベンション協会の役員になっておりますので、年に数回は協会から色々な観光の話を聞くのですが、やはり思うような観光の状況にはまだ至ってないみたいです。だから佐渡金山が世界遺産になって、ここでいかに観光客を直江津、上越地域で一泊してもらうかに苦労されてるようです。

―いわゆる大型観光じゃない時代ですからね。

小林　個人観光ですからね。

―糸魚川に用がありまして、ぶらぶらしてみたのですが、観光客が多いのにびっくりしました。火事からの復興状況を見に来た人もいるみたいですけれど、まちの中にできた新しい施設が意外に魅力的だったりする。泉家という蕎麦屋さんは昔のイメージのまま復興されていて、お昼時、入れないぐらい人気です。

小林　泉家は昔から入れなくて有名でしたね。

日馬　不謹慎な話ですけれど、大火の後の広い土地を利用して「駅北広場キタレ」という地下防火水槽を備えた施設を作ったり、雁木通りを綺麗にしたりとか、単なる復興ではない変化を感じます。

小林　糸魚川はすごく上手だと思うんですよ。フォッサマグナ、翡翠、それから奴奈川姫。それらを全部連携させて縄文の施設とか、そういうものをちゃんと周遊できるようにしている。

大糸線絡みもあるけれど、諏訪や関西圏との交流など

戦略が長けていると思うんですよ。そして海を生かしている。海など、ここにいるとなんでもないんだけど（笑）、そういうものをコンパクトに活かしているというか、たわいもないようなことも観光資源にしている。

日馬　そういう意味では、上越に比べて観光資源がないにもかかわらず、観光のことで言えば糸魚川の方が上かもしれませんね。

―かといって、それを一生懸命、ムキになって見せようとはしていないですね。昔からいう、いわゆる糸魚川文化圏というのもある。

　それとヒスイ王国会館の土産物店は小さいですが魅力的なものが多いですね。

小林　いい意味で自分の生活が最優先で、小布施と似ていますね。小布施も自分の生活が最優先で一七時以降はそんなに観光客はいらねえみたいな…。

日馬　先日、予定があって糸魚川に行ったのですが、駅前の飲食店街が結構、賑やかなんですよ。

小林　エリアが狭いですからね。

日馬　その利点はありますし、結構、外人も来ていたりするんですよね。

小林　三〇〇メートル四方ぐらいのとこでやっているんだから、とってもやりやすいかもしれないですね。

―直江津の居酒屋さんは安くていいって言うんで、人気なんですよね。

小林　最近、増えているんじゃないですか。駅前周辺ね。

―だから「じょうえつバル街」のようなイベントをやったらどうなんだと言ったら、フリのお客さんが来て、常連さんに迷惑がかかるからいらないと言われたとか、嘘のような話が…。

小林　確かにね。

日馬　高田の駅前にもやはり若い方々がお店を立ち上げたり、本町の中でもぽつんぽつんとですが、ちょっとおしゃれなお店だなと思う店を若い方が出されていたりしますね。

　直江津の場合には密集はしてないですけど、家賃が安いので、安い設備投資で店を立ち上げられると、若い方々が出店されるという話を結構聞きます。信金本店に来て、「新しく店を持ちたいんだけど融資をお願いできますか」というような相談をここ数年いくつか受けています。

―今の状態では、直江津はハシゴするにはちょっと距離がありそうですね（笑）。

日馬　そうなんです。

小林　でも街中の結構古い家を改造して一棟貸しの民泊みたいのが増えてきましたよね。

―直江津のまちなかにライダーのための民泊が生まれました。



駅北広場キターレ

日馬　そのもうちょっと行った先の焼き鳥屋さんは、朝まで電気がついていたり…。

小林　だから需要は掘り起こせばあるはずなんですよね。

―ＳＮＳで情報発信するとか。ここ一、二年、祇園祭を見に来る県外の人が多くなっています。「花火と神輿の川下りがすごく面白いと聞いて、会津から来ました」というような人が結構いるので情報発信というのはすごいなと思います。

　ただ批判だけというのもどうかと思いますが、無理して通年観光にしなくてもいいんじゃないかって。

日馬　全くその通りですね。

―祇園の時に来てもらうとか。夕日が綺麗な時に来てもらうとかっていうようなあり方でいいんじゃないかなって。

小林　そうですよね。

―先ほどの空き家の話で、高田地区が「結構、流行っているじゃないか」という話もありますが、直江津はそうじゃなくて、昼日中の食べ物屋もないし、何もないけれども、まちの中をうろうろするのが面白いよと言って、回ってくれる人が結構いるんですよね。

日馬　規模は小さいですけどね。スマホを見ながら歩いて回っておられる少しシニア寄りのご夫婦が結構いらっしゃいますね。

―その方が面白いかなという気もします。

日馬　本当におっしゃるように、その通年観光に耐えられるような、一年間、そこへみんな来るような、核となるところがないわけですから。それを目指そうというのは、私もちょっと無理があるんじゃないかと。

小林　やっぱり地域の生活の範囲の中で「ちょこっとだけおもてなしする」というような期間はあるけれど、基本は崩さない。先ほどの糸魚川や小布施の話じゃないですが、やはりそういうスタンスが必要だと思うんですよね。息の長い活動するにはね。

　小布施なんか徹底してはみ出さないですよね。

―普通ですと、もうちょっとなんかやりそうなもんなんですけどね。でも、やったらダメになっちゃうんでしょうね、その辺がよくわかっていて無理をしない。

日馬　直江津駅前のプレッソ直江津（マンション）の一階に免許センターができると、相当な方が免許を書き換えに来られて、そこから無印良品や水族館、屋台会館へ行ったりする直江津のまちなかの回遊が図られるという触れ込みだったようですが、ちょっと片すかしだったかなって。

小林　免許更新の手続きがスムーズですね。あっという間、数分で終わっちゃう。あっけにとられるぐらい。

日馬　そうなんですよね。そこで一、二時間待つなら、ちょっと違うところへふらっと行ってみようかなんて言うんですけれど。待っている間にちょっと食べ物を食べたりとかっていうことも当初イメージしていたんですけど、そんな時間はないくらい早い。

―今、お話に出た、うみがたり（上越市立水族博物館）ですが、まちの人に意外に受け入れられてないというのがあるようですが。

小林　最初はすごい期待感があったんですが…。

日馬　そうですね。立ち上がった時には色々とコミュニケーションをとったり、お話や情報交換をさせてもらったり、いいものにしようとか、周りにお店をたくさん出店していただければいいなみたいな話があって、小林さんがおっしゃるようにオープン当時は期待感がすごくあったんですけどね。

―いつも私が文句を言うのは「どぶね」が無い。

小林　どっか行っちゃったね。

―中郷の民俗史料室（岡沢拠点収蔵施設）にあります。これは持論ですが、昭和二九年に国指定文化財に指定されてそれを保管する施設として直江津市立水族博物館になった。当時、水族博物館は全国に七つしかなかったんです。「こどもこうほうなおえつ」に市民の名誉のように書いています。

小林　その辺が残念ですよね。博物館協議会の委員もやっていて、いろんなところを視察もしたんですが…。

鉄道の結節点として

―新幹線のことですが、今更、新幹線駅があそこにあるのはおかしいと言ってもしょうがないことですが、トキ鉄はＪＲ時代よりも運行本数が増えているはずなのに、なんだか不便だという感覚が皆さんにあって、あんまり乗りたがらないんですけれど。あれをもう少し利用したら面白いなと思うんです。

小林　この間、福井へ行ってきたんですけど、金沢を中心に、かがやきとはくたかの関係が良いとは言えないと思います。そして、新潟や長岡の人たちは、しらゆきで上越妙高駅へ来ますよね。帰りはかがやきで、金沢駅から高崎経由で帰る、かがやきが止まらないことの不便さというのは大きいですよね。

日馬　全くですね。

小林　だから上越地域のこと考えると、県で試案を出している在来線高速化計画。

日馬　信越線か、ほくほく線を使うかということですけれど。

小林　いずれにしたって早くやってほしいなと。

日馬　そうですね。

小林　直江津駅は通るだろう（笑）

日馬　直江津からだと、ほくほく線に乗って越後湯沢駅で乗り換えしても大した時間じゃないですし。そう考えると、ほくほく線もトキ鉄も考え方があるじゃないかと、最近思うようになりました。

―信越線を高速化して糸魚川までにするのが一番、いいと思いますが。

小林　それでいいと思うんですがね。

日馬　ただ、柿崎駅から鯨波駅とかあの辺のところを新線にしなければ…。

小林　そこだけだと思いますよね。

日馬　あそこさえ解決できれば、私どもも新潟へ行くのにすごく便利だなって。

―交通の結節点であることには間違いないんですけども、非常に不便。

小林　この地域の不便さもそうだけど、新潟、長岡という広域が直通になっていないことが、すごく不便ですね。住んでいる皆さんが。

　新潟までは車で一時間半とか二時間かかりますけど、長野駅は一時間で行っちゃいますんでね。新幹線を使えばもっと早いですし。

―ここにいると、新潟という意識とか、行こうという意識が湧いてこないですよね。

　富山だって高速だと一時間半ですからね。新潟とほぼ同じ距離なんですが、新潟がなんとなく遠い。米山を越えないといけないという気持ちなのか…。

小林　そうですね。

日馬　今、県内業界内は三条信用金庫さんが一番大きい。

だけど、関係機関も当然新潟市にあるものですから会合は大半新潟市なんですよ。月に一、二回は新潟で会合がありますが、私や新井信金さんが新潟市まで行くというと、やはり不便ですね。行くときは運転してもらって行くんですけど、会合が終わった後に宴席がある場合は、電車だと泊まってくるしかないんです。

確かにこの直江津は一つの拠点ですけど、今の不便さだとこれ以上どうにもならない。解消する一つのアイデアとして、高速鉄道化は解決策の一つになると思いますね。県は早くもっと押し進めてほしいですよね。

ただ新潟行き高速バスは結構充実してますね。

小林　高田に回って帰ってこなくちゃいけないというのもありますが。

上越なおえつ信金倶楽部の今後

―長々とお話聞きましたけど、上越なおえつ信金倶楽部の解散について。

日馬　来年の三月に総会がありますので、その時に正式に皆さんにお話をさせていただきます。すでに会員の皆さんにもご通知はしてあるんですが。

小林　各支店ごとの会はそのまま残るんですけど、高田のたかしん会としんきん地域経営塾と上越なおえつ信金倶楽部、その三つは経済界のものなんですね。重複している会員もいるし、初期の目的は十分やってきたし、両信金が合併して二〇周年経つから発展的に解散して、新たに会を発足しようと…。二〇周年というこのタイミングでなきゃね。

日馬　今、小林さんおっしゃるように、こういう機会じゃないと、これを逃しちゃいますと、またやれなくなっちゃうと思います。

いろんなお客様にはご意見もあるだろうし、お考えもあるでしょうけど、発展的な解消ということで多くの会員の皆さんには新しい会にご加入いただきたい。

―長い時間ありがとうございました。

日馬　ありがとうございます。小林さんからたくさんいいお話聞かせていただいたんで、ありがとうございました。

―お二人の話は「発刊のことば」にある「―経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、―根を同じくする一本の樹である…」ことを実感させるものでした。

＊　＊　＊

―信金倶楽部と「直江の津」に対するインタビューは終了しましたが、「地域の未来を紡ぐ一〇〇年の絆」というパネルが立てかけてありまして、先ほどから気になっていましたので、最後の最後にちょっとお聞きしたいのですが。

日馬　はい、来年の令和七年七月七日に創立一〇〇周年を迎えます。ロゴマークは全役職員に作品を募って出来上がったものです。

私共の金庫は大正一四（一九二五）に発足しましたが、大正・昭和・平成・令和という激動の一世紀を経て一〇〇周年を迎えることになりました。

―過去の記念誌を見せていただくと、経営のご苦労がよくわかりますね。

日馬　ひとえに今日まで当金庫を支えてくださっている会員および総代の皆さま、お取引先さま、地域の皆さまからのご支援の賜物だと感謝しております。そして、こ

れまで歩んできた道程を振り返りますと、今日までついでくださった諸先輩方にも改めて敬意を表さなければなりません。

現在のわれわれの取組み一つ一つもこの日々の積重ねであり、未来へつながっていくものであることを強く感じておりますし、これからの五〇年、一〇〇年に向けて、心新たに日々の業務に対し、全身全霊で取組み役職員一丸となって地域の発展に貢献していかなければならないと肝に銘じております。

―次の一〇〇年に向けては。

日馬　当金庫の経営戦略の基本は変わることなく「お客さまとの対話こそが収益の源泉」であることを認識しております。そして「郷土愛」と「信金愛」を全役職員が共有し、信用金庫らしさを明確化し、「笑顔」でお客さまのもとを訪問し続ける「対面営業」を継続してまいります。

また、デジタル化の波が押し寄せる今日ですが、一見「非効率」とされる対面営業で「お客さまを知り尽くし」「お客さまに一番近い」存在とされる「オンリーワン」の金庫でなくてはならないと考えています。

デジタル化が進み「足で稼ぐ営業」は「セグメント営業」に進化し、「御用聞き営業」は「ソリューション営業」へと深化してきていますが、その根っこにあるものは「信金魂」であり、「不易流行」であると思います。

これからも新たな課題に対し、新しいものを取り入れながら変革を行い、地域のそして当金庫の持続可能性を高めていくよう取組みを実践していきたいと思っています。

―最後に、良いお話をお聞き出来ました。



マスコットキャラクター
上杉の信ちゃん



創業 100 周年のロゴマーク

「直江の津」で見てきたもの

「景色」から過去・現在・未来を見渡す

小島幸雄

小島さんには平成一六年の創刊号で「掘ったら何が見えるか直江津」というタイトルで執筆していただいて以来、本誌に関わっていただいてきました。ことに復刊した三三号からは毎号、頸城平野を見通し、「自らが立つ足元の地べたを掘り起こす」論考を多岐にわたってお願いしてきました。

本号では、筆者が見渡す頸城平野の「景色」を執筆していただいて終刊号といたします。

はじめに

去る十一月九日、オーレンプラザに於いて、「こしのくに国府サミット」が開催されました。筆者も長く国府の探求にかかわった縁で、「三郷地区の歴史・史跡を研究する会」の横尾彰平会長さんと一緒に登壇する機会を与えていただき、最後に一言だけ「古代越後国府は奈良時代に突然頸城に置かれたのではなく、弥生時代に稲作を受容して以来の生産活動の根幹となる土地があって国府に発展してきた」とまとめたのでした。

ここではその一言を考えるに至った経過を遺跡という切り口から述べ、これまでに本誌で取り上げたことをまとめて地域の持つ力を考えてみることとします。本誌に登場した遺跡をすべて記す紙数はありませんが、筆者が「頸城の景色」を見渡す際に欠かせないと考えるものを中心に取り上げることとし、ここにまず列挙してみます。

古いものから挙げてみましょう。近年、地下四ｍから四千年前の縄文時代後期の生活跡が見つかった「下割遺跡」、ヒスイの玉作り工房として弥生時代中期に活動が開始された「吹上遺跡」、さらには同時代の遺跡と思われる砂丘後背湿地に面した五智の遺物と森成コレクションのクリス型石剣を出土した大潟周辺、弥生時代の終わり頃から古墳時代の初め頃に堀で囲まれた集落が営まれた「釜蓋遺跡」、古代越後国府と関連遺跡と目されている三郷地区の「今池遺跡」と周辺の遺跡群、中世には湊を中心に流通の拠点として名をはせた越後府中の直江津、そして福島城跡、高田城跡と続きます。

私が書き連ねてきたものは頸城の歴史の一場面を切り取って紹介したものです。しかし、それは単に歴史の事柄を紹介したのではなく、それを通して歴史の記録を私たちの将来にどう生かせるのかを述べてきたつもりです。それでは遺跡を一つずつ登場させて頸城という空間の「景

色」を読み解いていきます。

平野中央部に埋まっていた縄文遺跡

上越市米岡・北田中地内で調査された「下割遺跡」がここでの主役です。数年前に地下四mから四千年前の縄文時代後期の遺跡が発見されたと報じられ、古代史ファンの注目を集めました。「田んぼの下四mに縄文時代の人が住めたのですか？　縄文時代は丘の上に住んでいたのではないのですか！」こんな質問を受けたものです。この質問は頸城の縄文時代に興味をお持ちであったなら、すべての方が抱く疑問といってよいでしょう。川に注目して考えてみます。

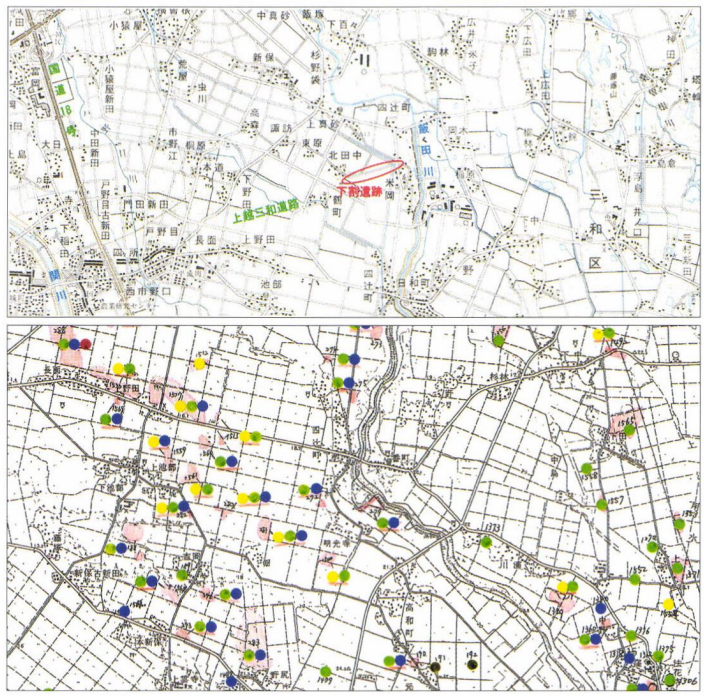
縄文時代の遺跡が地下四mで発見された状況を見てみます。まず報告書をもとに遺跡の情報を探ると、地表の標高は海抜一四m前後です。現在は遺跡の東側を飯田川が流れています。縄文時代の生活面は標高一〇m、古墳時代の生活面は一一・五m、飛鳥時代は一二・五m、平安時代から中世の面は一三m以上となって現代にいたるのです。各時代の間には洪水による堆積層があったので、私たちが調査した平成町の「中島廻り遺跡」の状況から考えてみましょう。

「中島廻り遺跡」付近の標高は約一〇mで、発掘当時は畑地でした。調査を始めて二〇cmほどの耕作土を除いたところ、奈良時代中頃、西暦七五〇年前後の掘立柱建物の遺構が検出されたのです。それは砂質土を掘って建てられていたので調査は簡単に終わると思われました。しかし、念のために砂質土を掘り下げたところ、厚いところでは五〇cmくらい掘り下げた下層から古墳時代前期の遺構が現れたのです。遺跡の表土の標高は約一〇mですから九mより少し高いところで古墳時代前期の人たちが活動していたことになるのです。川に隣接しているということは、それだけ水害の危険性も多かったのです。

私たちは現在の一面水田化された頸城平野を日常の「景色」として見ています。しかし、この景色は戦国時代以降に多くの時間と労力を費やして造られたもので、そこに至る経過を明らかにすることはとても困難なことだと思います。そして今もほ場整備という事業で水田の景色が変わっていくのです。しかし、つい六〇年ほど前までは古い景色が残っていたことも知られてはいます。

私は頸城の先人たちが生活の向上を目指して行ってきた水田の改良を河川改修（流路変更）という面から見てきました。今話題としている「下割遺跡」の東を流れる飯田川も流路変更が分かる川の一つです。極論すれば、頸城の美田は河川改修によるものだといってよいと考えているのです。

このことに気付かされたのは四〇年も前のことになります。新潟県教育委員会が調査した「八反田遺跡」（加賀街道小峰橋近くの高速道路下を調査）で縄文時代前期五千年以上前の竪穴住居跡が調査されたのです。縄文時代の遺跡が平野部でも見つかるのだという驚きもさることながら、この調査の最大の成果は、上越教育大学の西付近から関川との合流までの正善寺川が人口の川であることを証明してくれたことでした。洪積台地の平山段丘と並行に流れて水田部に至る河川だと思っていた正善寺川が、沖積地と確定していた水田の下に縄文時代の遺跡が隠れていて、沖積地でなく洪積台地に人が住んでいたことが分かったのです。稲荷中江用水が大学を過ぎると大きく東に進路をとるのは、水田下に残る洪積台地を超えることを避けて迂回していることも教えてくれました。



上　下割遺跡位置図
下　下割遺跡の南から西に展開する遺跡の並び

下割遺跡の南から西に向かって斜めに遺跡の列が確認されている。これは、現在遺跡の東を流れる飯田川が以前遺跡の南から西に流れてその自然堤防の上で人が活動していたことを示しています。飯田川は今の重川の位置にあったようです。

古い地形図を見ると春日野辺りから北側の道路と南側の道路の形状が大きく異なっていることが分かります。耕地整理前はこのような景色が見られていたのです。正善寺川の改変は春日山城の整備と無関係ではありません。総構の整備など城域の拡大と集住化のためになされた都市計画だったのではないかと考えています。

縄文遺跡は基本的に洪積台地で発見されますが、まれに沖積地で見つかることもあって沖積地の地下に自然堤防や洪積台地が隠れていることが分かってきました。では、なぜ縄文人が沖積地の中央に進出していったのでしょう。私はサケ捕獲のために秋の一時期だけ活動した、縄文人のキャンプサイトではないかと想像しています。今の飯田川は沖積地に掘られた人工河川で遺跡の西側に当時の飯田川があったと考えられるので、縄文人がサケを追って川を縦横無尽に走りまわる景色が目に浮かびます。沖積地は冬を迎える縄文人たちの保存食料を得るための貴重な活動の場所だったのではないでしょうか。また、平野だけでなく五智の砂丘上にも縄文時代前期の遺跡が知られています。五〇〇〇年以上も前に、縄文人は平野へそして砂丘へと様々な環境の場所に進出を果たしていたのです。

弥生時代の玉作り遺跡と地域の力

上越市の南端、妙高市の境にある稲荷集落の西側で、今から二二〇〇年くらい前にヒスイの玉作りを行っていた「吹上遺跡」が発見されました。縄文時代と生活の根幹が異なり、稲作を行っていましたから稲を育てる田が必要です。妙高火山由来の火砕流で形成された高台とその伏流水が期待できる妙高市上百々（かみどうどう）付近、それに青田川扇状地の豊富な伏流水を期待できる稲荷地区の「吹上遺跡」がその適地として弥生人の注目を集めたのでしょう。断っておきますが、遺跡周辺で弥生時代の水田は今のところ発見されていません。

筆者には「吹上遺跡」の発見から思い描いている古代史の夢があります。奴奈川姫の伝説です。能生生まれの私は糸魚川高校に入学し、現在の糸魚川市内のいくつかの遺跡の発掘調査に参加させていただきました。その頃から奴奈川姫は糸魚川の専売だと思い続けてきたのです

が、「吹上遺跡」の発見は私の奴奈川姫についてのイメージに大きな変化をもたらしてくれました。「ヒスイの産地と奴奈川姫の居館を別に考えたらどうだろう！」というものです。ヒスイの産地は上越市域に求めることはできませんが、奴奈川姫の居館はそれと必ずしも同一に考えることではないと思うのです。ヒスイを採取する川（姫川など）と姫の居館を別にして考えると、水害に強い安定した居館を持ち、これも安定した水田でコメ作りを行える青田川扇状地や関川と支流の段丘崖の裾野は格好の居館と生産地になり得たと考えたのです。かつては扇状地の湧水を生産根拠と考えてみましたが、実際には段丘裾野で行う水田耕作が最も効率の良い水田だと考えるに至っています。以前述べた砂丘と後背湿地の接する地域も、稲作適地として評価すべきです。

少し大きな視点で頸城全域を考えてみようではありませんか。かつて、青木重孝先生（故人）が話しておられたように「三つの黒姫山で囲まれた範囲が奴奈川姫の国だった」、こんな夢を語ってみるのも古代史の視点を増やすことになるのではないでしょうか。高校時代青木先生から問われたことがあります。

「小島君、奴奈川姫は色黒だったってしっとるか？」

当時は、なんて馬鹿な〝問いかけ〟をと思いましたが、なぜか五〇年以上経た今でも忘れることはありません。

そのようなことを考えていた平成一七年、新幹線新駅周辺の調査で「釜蓋遺跡」（上越妙高駅前の環濠集落）が発見されました。環濠とは堀のことで、集落を堀で囲むという「館」のようなものと考えられています。「吹上遺跡」の調査からずっと弥生時代の遺跡と奴奈川姫の関連を考えていた筆者は、「釜蓋遺跡」の発見によってさらに深く姫の居住地を考えるようになりました。現在の糸魚川市・妙高市・上越市域は当時同じ勢力の土地だったと思われますから、地域を広く考えてみたらと思っているのです。







右　吹上遺跡出土の土器
左　吹上遺跡出土の玉類
土器は信州系と北陸系が混在し、時期によってそれぞれの系統が増減します。ヒスイをはじめとする玉類は山を越えて長野を経て各地へ運ばれていったようです。

越後国府と国分寺の所在

弥生時代から奈良時代まで少し時間が経過しました。古墳時代を飛ばしましたが、その理由は後述します。国府の所在を探ってみます。昭和五七年、今池地内で越後国では見たことのない遺跡が発掘されていました。「今池遺跡」です。国府ではないかと斯界の注目を集めましたが、確実な証拠が得られずに「〝国府〟の一部ではあろうが中核施設ではない」という微妙な評価なのです。そこで、筆者は地形という「景色」で「今池遺跡」周辺の古代を描いてみることにしました。前述の縄文時代と弥生時代は、生活の多くを自然環境に拠っていることに大きな変

化はありません。古代国府は政治都市ですから、国中から集められた税や中央政府からの指示文書などを安全に保管しなければなりません。そして、国府は役所や国分寺などの施設があるので、安全でかつ広い面積を確保できる平坦な土地が必要なのです。

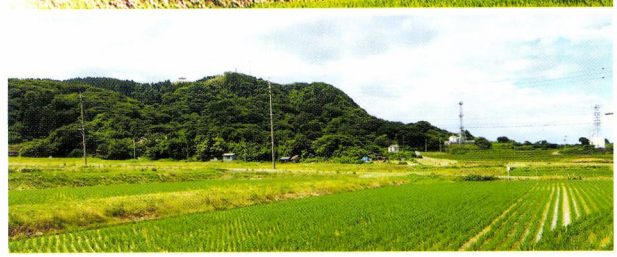
そこで、それらの条件を確保できる土地を関川の段丘崖の上にある平坦地に求めることにしました。それが三郷地区なのです。三郷小学校の裏手にある段丘は今でも五～六ｍもあり、関川の堤防が無かったとしたら川と約一〇ｍの段差があるのです。人の手で工事を施行する方法がすべての古代の土木工事を補えて、かつその効果を飛躍的に高めるのは、自然が造り出した「景色」に他ならないのです。筆者が「景色」にこだわる理由がそこにあるのです。五〇年余に及ぶ遺跡との接点から学んだ歴史の営みは、遺跡が所在する場所、ただその一点に集約されていると考えられます。

タテとタケ（異なる音なのに同じ性格の遺跡？）

時代は中世に移ります。平成四年、横曽根地内の「竹之内」でほ場整備事業に先立って発掘調査が行われ、一五世紀から一六世紀前半の館跡が姿を現しました。耕地整理の実施によって水田化され遺跡は「館」を象徴する土塁や堀などの遺構は全く姿を消していましたが、発掘調査では堀が屋敷を巡っていたことが確認されて「館」であることがはっきりしたのです。

平成一九年（二〇〇七）は、親鸞聖人が承元元年（一二〇七）越後国府に流罪となってから八〇〇年の年にあたっていましたので、展覧会など諸行事が行われて筆者も博物館でお話しする機会を与えいただきました。話の内容はともかく、私は「竹之内草庵」に強い関心を持ったことを昨日のことのように思い出します。親鸞聖人の草庵はなぜ「竹之内」と形容されるのだろう、ただ草庵ではいけなかったのは何故だろう、などと自問自答を繰り返してしていました。その時に思い出したのが、前出の横曽根地内で見つかった館跡の「竹之内」という地名だったのです。





上　名立町史に載る「竹の内」の写真
下　現在の竹の内付近

名立の「竹の内」は筆者に多くの示唆を与えてくれました。頸城の中世を語る「カギ」となる土地と思われ、とても興味が湧くのです。

五智国分寺を訪れると西側から北側の大きな土塁に圧倒されます。どう考えても寺院とは思えません。国分寺は永禄五年（一五六二）に謙信によって再興されたものとされます。その前も寺院だったようですが、寺院の以前には武士の居館だったと推測されています。そこから導かれるのは、武士の館であったこと、謙信政権と無縁の居館であるということ、居館であったことを否定する名称が必要であったこと、それらを総合して「竹の内」と称した場所に親鸞の伝承が重なって「竹之内草庵」が

成立したと考えたのでした

「タケ」とも「タテ」とも表現されない守護屋敷？

越後府中で最も大きな中世の館は、直江津駅とその南側にあった、想定「守護館」です。そして、その館は土に埋まってからは「タテ」とも「タケ」とも表現されずに忘れ去られてしまったのです。しかし、唯一越後守護上杉氏との関係を示唆するように至徳寺の名のみが残されたのでした。筆者は金子拓男先生（故人）の指導で、通称「伝至徳寺跡（至徳寺遺跡とも）」の区画を示す遺構を調査していました。その中で昭和五〇年代に東雲町（旧至徳寺）の田中勝四郎さん（故人）のご厚意で公図を調べたことがあったのですが、館に関する地名にはついにたどり着くことはなかったのです。しかし、平成四年から区画整理事業の事前調査で発掘を開始して、その出土品の優秀なことに目を奪われました。一五世紀に使用された威信財といわれる焼き物がたくさん出土し、幅が六mもある堀が一辺二五〇mに及ぶことも確認されたのです。御館跡よりも大きな館の評価はやはり「守護館」とすべきということになっているのです。



伝至徳寺跡出土品

ではなぜ「守護館」や「上杉館」、または「至徳寺館」というような守護家に結び付く名前ではないのかを考えてみましょう。上杉謙信が上野国平井城主上杉憲政から、「関東管領」と「山内上杉家」の名跡を継承したことは周知のことですし、「越後上杉家」を継承していないこともご承知のとおりです。ということは、謙信が越後を掌握するときの立場はあくまでも「関東管領職」であり、越後守護としての権威ではなかったと考えられます。謙信は不要な守護館の使用を停止して権威を否定したといってよいと思われます。守護代は守護が失脚しても守護屋敷を使用できない、とも教えていただいたことがあります。謙信が使用しなければ景勝も使用できるはずもなく、守護館の使用は堀氏入封まで中断したようです。越後上杉氏の象徴だった守護館は、守護家の断絶によりその権威を失って再生することはなかったのです。上杉定実が死去してから景勝が会津に転封となるまでの五〇年間、守護館は歴史の表舞台から姿を消してついにそのまま人々の記憶からも失われていったのです。そして「至徳寺」という名称だけが残されたのです。

春日山城跡から福島城へ、そして高田築城

春日山城は何時築城されたか、誰が築城者か、城主の館はどこかなど不明な点が多く、謎の多い城といえるでしょう。しかし、山城の多くがそうであるように、戦国



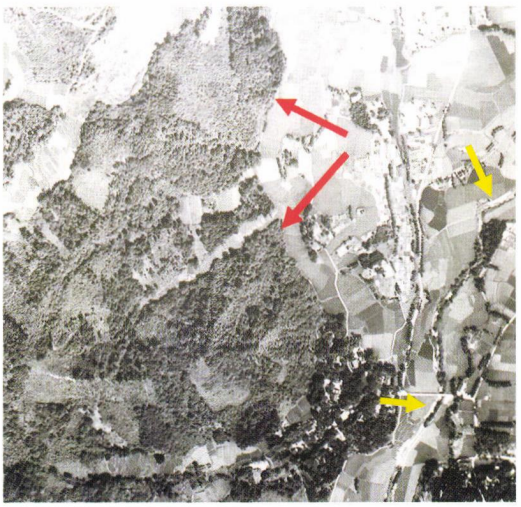
頸城平野における時代の中心の移動
赤➡は正善寺川の旧流路、黄➡は現流路

古代越後国府と国分寺は、平野の中央にあったと考えられています。信濃国から越後国府を目指した人々が妙高山麓を経て新井に至って国府を望めたと考えるとワクワクします。

そもそも春日山城という名にしても、春日神社が鎮座していた山に城を築いたということであれば春日山城も宗教施設が出発点にあります。さらに謙信の死後遺言によって春日山城内の不識院（ふしきいん）に葬られたとすれば、それも宗教施設の一面を持っていたことになります。近世の平城は都市空間を有してシンボリックな統治の象徴とすれば、山城は見張り所であったり宗教施設であったりと、その山が有してきた機能の集約場所ということになります。「景色」そのものが山城が有する意味なのです。

春日山城から離れて越後府中があることも問題を複雑にしています。湊を基軸として経済機能の集約地が統治機能の城と分離されているのです。まして謙信は守護代出身ですからその掌握には想像を超える腐心をしたことが推測されます。そのためには府中の拠点が必要だった、だから「御館」が必要だった、と考えています。「御館」は関東管領上杉憲政の館といわれてきましたが、守護権力に対する関東管領権力の象徴として存在したと考えます。

上杉景勝に替わって春日山城主となった堀氏はそのようなしがらみはなくなったと思われますが、上杉氏から堀氏に替ったという権力の移行を示すために福島城を計画したのでしょう。そして「城はこういうもの」という統治の象徴を作るため石垣を用いたと思われるのです。それが、築城に七年を費やしたという長期にわたる工事なのです。福島城は短命でした。その一因に海岸に近いこと、平野の河川がすべて集約される関川の岸辺に位置することが挙げられます。城自体は自然堤防上にあって極端に低湿地ではありませんが、城下町は低地に展開せざるを得なかったことは明らかです。福島城の短命な理由もいくつか挙げられていますが、自然環境の厳しさ、水害、おそらく城下の水害の多さが致命的だったのでは



期に誰がいたか、例えば春日山城主が上杉謙信と景勝、そして堀氏となったというように、その終末期に限って知られている城が多いのです。また、城を山に築くのは眺望の良さに主眼を置くためであり、そのことが山そのものを祈りの対象とする宗教施設と重なることも山城をわかりにくくしていると言えます。

ないでしょうか。そして、そのことが高田築城に生かされているように思えるのです。

防災都市高田城下町

慶長一九年（一六一四）、松平忠輝は福島城を廃して高田に新城を築きました。平成二六年（二〇一四）の「高田開府四〇〇年祭」も記憶に残る事業でした。

さて、私は高田城下町のお話をするたびにこの町の安全安心に配慮した街づくり、防災都市の一面について考えをお伝えするよう心がけています。もちろん城郭都市ですから戦時の備えがなされているのは当然として、とても細やかな、特に城下に対する気配りがとても気に入っています。市中と総構（そうがまえ）は青田川によって結界を設けていて、城下が一段高い面に配置されています。これは明らかに市民を水害から守るためのもので、沖積地でありながら関川によって形成された段丘を巧みに利用しています。南本町の通りは青田川を掘り替えていますので、掘った土砂を積み上げて街並みを形成しています。通常掘った土には水分が多く含まれていますが、通りの民家の裏には一段低い土地が防火の意味も持たせて裏通りとして造られているので盛り土の水分が抜けて安定しています。この造作は南本町に限らず東本町でも見られます。

本町・仲町・大町はどうでしょう。この三本、いいえ、加えて寺町（表裏）と線路で六本の通りは相当古い土地利用を見て取れると思います。古代の荘園が造られた頃の耕地の区画が残っているのかもしれません。稲荷中江（いなりなかえ）用水まで素晴らしい平坦面の土地を形成しているのです。山麓線（県道63号）を国道8号から南下して御館川の橋を超えると平坦になり高速道路の下までまっすぐです。正善寺川から大学前の信号までは緩くカーブするものの再びまっすぐになって飯の交差点まで直線です。大学前からの道は以前からあった直線の砂利道をそのまま利用する形で設計されたもので、水田も道と並行する形で残っています。ところが、飯を過ぎるとカーブとアップダウンを繰り返す道路となり古い景観ではなく洪積台地を横切って設計されたことを見て取れるのです。本町・仲町・大町、そして鉄道から寺町の高田城下町は、慶長一九年に新設されたというより古い土地利用の姿を踏襲して整備された街並みと考えられるのです。

総構から城内は、総構の土塁で城下からの水の流入を防ぎ、堀や水路で関川方面に水を抜いていました。街並みを歩くとそこかしこに小さな坂のアップダウンのある道路を見ることができます。これなどは、排水を通す水の道や旧河川だったのでしょう。

城下町といえば城が高い場所にあるものですが、高田城は逆で城下が高く設計されています。私は忠輝の計画都市を「市民のための防災都市、高田城下町」と呼んでいます。ただし、高田城下町は短期間で計画されて施行されたのではなく、越後国府が頸城に置かれて以来一三〇〇年に及ぶ古代からの長い年月と多くの人間がかかわった都市といえると思うのです。

用水と河川の流路変更

頸城平野を貫流する用水は、東から上江用水・中江用水・大道用水・稲荷中江用水があります。これらは現在の水田にはなくてはならないものですが、その起源は河川の流路変更によって生じた土地の乾燥に起因するものと考えられます。

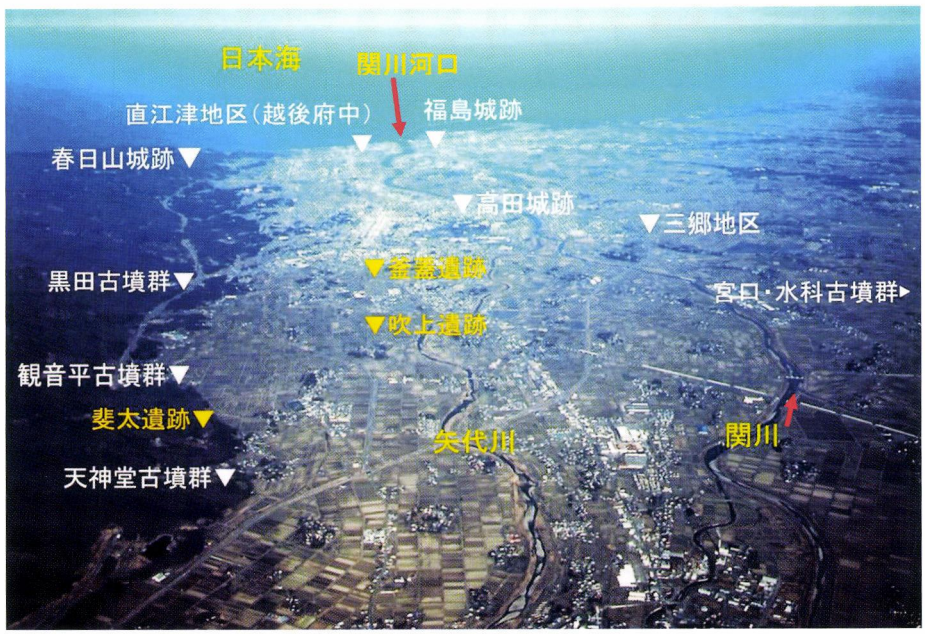
造形物だったのです。そしてその下には周囲の山稜から流れ出た河川が運んだ土砂によって形成された自然の地形も眠っているのです。旧飯田川は重川や戸野目川として、旧櫛池川は戸野目川として地下に流れているのです。

「景色」――頸城の平野を見てきた思い――

五千年も前に生きるために平野や砂丘に進出した縄文時代の人達、二千年以上前に稲を育てヒスイの玉作り村を作った弥生時代の人達、古代国府の都市づくりを担った多くの人たち、戦乱の時代を勝ち抜いた武将、安全安心の都市計画を怠らなかった大名、みなそれぞれの時代の要請と自身の生活を支えるために生きてきました。最後に少しだけ私見を述べておきたいと思います。

先ず、私の見ていない「景色」、それは大きな古墳です。ここが一番の疑問です。確かに頸城には宮口・水科・菅原などの平野東部の古墳群、西部には観音平・天神堂と黒田古墳群など日本海側北端の群集墳密集地として知られていますが、それらは古墳時代中期から後期のもので、私の疑問は前方後円墳や前方後方墳といった古墳時代前期の大型古墳が見つかっていないことなのです。それらしきものは報告されていますが決定打にかけているのです。富山県には古くから知られていますし、新潟県内では弥彦山より東では知られているのに頸城平野では未発見なのです。無いというのはとても大きな意味を持ち、「こしのくに」という概念以前に何らかの勢力下、例えば信州勢力との関係があったのではないかと考えています。「吹上遺跡」の調査以来ずっと抱いている疑問です。

次に都市空間の移動です。謎の越後国府などといわれて久しいのですが、その後の越後府中も直江津から福島



頸城平野の景色を南の空から見る

遺跡を調査すると現在の地表からは推測できな現象が現れることが多々あります。平野の調査では、河川が流路変更されていることを示す例もありました。最も奇異に感じたのは雨がやんで陽が照っているのに戸野目川が増水した時でした。これなどは関田山脈の降雨が平野より遅くまで残り流れ下った水が流路変更前の旧河道（地下の）に入り込み、伏流水となって変更後も利用されていた河道に流れ込んだものと推測しています。平野一面に広がる美田の「景色」は、私たちの祖先が汗を流して造った

城へ、そして高田城下町へ移動しているのです。高田開府四〇〇年という文字がそれを端的に示しています。五智に国分寺があり謙信が再興したといいますから、越後国分寺の法灯は間違いなく継承されているのですが、再興も原位置から移動したと伝えられています。信濃国分寺や佐渡国分寺、それに若狭国分寺のように古代国分寺の伽藍そのものでなくとも本堂が古代国分寺の伽藍の一部か、離れていても至近にあるという例が全国に見られますが、越後はそれまであった国分寺そのものを移動してしまっているようです。国府の機能が移動しても国分寺が残った例は全国六〇余国のいくつかで見られるのに、越後国はまちの「景色」そのものを移動していると考えています。

本稿は、筆者が「直江の津」に寄稿してきた「まちを見る視点」を集約したものです。もし、本号で初めて筆者の思いに接していただいたなら、図書館に並ぶ本誌のバックナンバーで詳細をご確認ください。根幹に流れているのは「否定」という論理です。「否定」を繰りかえした結果、まちの「景色」がぼやけてしまっていると考えてきました。

文化財は、時の流れの中で主役の座を明け渡したものが、たまたま破壊・滅失を免れて生き残る権利を得て静かに時間の経過を見続けているものと認識しています。静かに時の移ろいの中にいたものが価値を見出されて表舞台に登場することがあったら、そこに文化財として現代での価値が生まれると思います。そこに「景色」を見出しています。それとは逆に今新しく造ったものが「景色」として認識されるのはどれほどの時間が必要でしょうか？　それとも過去を「否定」して新しい「景色」を創ることにのみ自己の存在の意味を求めるとしたら、私たちにどんな未来があるといえるのでしょうか。そこにあるのは「価値」の「破壊」でしかないのです。

筆者が五〇余年遺跡を通して見た「景色」や、文化財を継承することができたら少し前の時代の「景色」を感じることができるかもしれないと思えるのです。「景色」を現代に生かす術を駆使してほしいと考えています。

長い間ありがとうございました。

元上越市専門学芸員

「直江の津」五一号から五四号までの総目次
一号から五〇号までは、本誌五一号をご覧ください。

第二〇巻一号（通巻五一号）　平成令和五年一月一日
巻頭エッセイ　私の直江津
直江津人として　笠原勇気
◆特集
「直江の津」50冊の総目次
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ 8
越後府中の守護所と館
「タケ」と「タテ」にみる権力否定
元上越市学芸員　小島幸雄
歴史は「今日」への手紙
されど〝かわたりもち〟

第二〇巻第二号　通巻五二号　令和五年七月一日
巻頭エッセイ　私の直江津
雨の国分寺にて　工藤弘美
◆特集
海は恐ろしい。恐ろしいが優しい。
◆長野県上伊那郡中箕輪国民学校直江津遭難事件◆
上越市出身の世界的建築家渡邊洋治生誕一〇〇周年記念
「斜めの家」を理解せずに上越の建築文化を語るなかれ
頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ 9
地下四メートルの縄文遺跡
―四〇〇〇年前の土地選択―
元上越市学芸員　小島幸雄
歴史は「今日」への手紙
古絵はがきから見えるもの

第二一巻第一号　通巻五三号　令和六年一月一日
巻頭エッセイ　私の直江津
直江津の冬、お正月の思い出　滝川鯉橋
◆特集
上越なおえつ信金倶楽部講演会
感じ良い暮らしと社会
良品計画代表取締役会長　金井政明
市民が中心　なおえつうみまちアート２０２３
もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる
なぜ〝御館〟なのか
二人の関東管領と越後府中―御館・守護所―
元上越市学芸員　小島幸雄
歴史は「今日」への手紙
直江津小唄にまつわること

第二一巻第二号　通巻五四号　令和六年七月一日
巻頭エッセイ　私の直江津
自然がクリエイティブの源　まるやまえみこ
◆特集
令和６年能登半島地震
―港町１・２丁目の取り組み―
第四一〇回〝旅する祭り〟祇園祭
もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる
紫式部の父　藤原の為時が赴いた
〝越後国府〟〝駅家〟のなぞ
元上越市学芸員　小島幸雄
歴史は「今日」への手紙
北越戊辰戦争の記憶

歴史は「今日」への手紙

残しておくべきもの 伝え：ておくべきもの

「但馬・米屋甚助出世譚」と泉蔵院の船絵馬

物語の米屋甚助の生国である但馬国瀬戸村は、現在の兵庫県豊岡市瀬戸で、円山川の河口が日本海面して江戸時代は北前船の基地として栄えたところです。

「近世海運史の研究」（柚木學著　法政大学出版局）によれば、弘化二年（一八四五）には五〇石から三〇〇石までの船が多数見られ大変栄えた湊町であったということです。

＊

主人公の米屋甚助は五〇歳で「身代限り」（破産）して、小屋に親子三人で暮らしていたところ、四〇〇石の船で越後今町を行き来している船頭の安左衛門が、「乗組員が病で船を降りたので、越後今町から大阪まで二両の給金で乗ってもらえまいか」と頼んできました。

家じゅうの小銭を集めて道中の小遣いにして、船に乗り込んだ甚助の船は越後今町湊へ着くと、船員のなじみの女郎衆が、

「お早いことと取りつき、かぶりつき候…」

と宿から飛び出してきて、船乗りはみんな下船してしまいました。甚助は初めての今町であり馴染の女郎衆がいるはずもなく船に残っていました。

甚助は思い立って、親父（水夫長）様に善光寺詣でをしたいと願い、許しを得て炊（炊事担当）に頼んで焼きめしを作ってもらって翌朝早く旅立ちました。一八里（約七〇㎞）を歩いて、夕方善光寺に着くとさっそくお参りし、お上人様から〝お数珠〟を頂き、宿に入って夕食が済むと旅の疲れで寝入ってしまいました。

夜中に隣の部屋から苦し気な声が聞こえてきて目が覚め、聞けば、旅人の幼い娘が急に腹痛を起こし、いろいろ手立てをしたが死を待つしかないということです。

甚助は懐にある越中富山の萬金丹（反魂丹）を

「身にも代えられぬ御薬なれど…」

「北前船頭の幕末自叙伝―川渡甚太夫一代記―」（師岡佑行編・解説／師岡笑子現代語訳　柏書房）は、若狭国に生まれた川渡甚太夫という北前船の船頭の一代記で、文化四年（一八〇七）に生まれ、明治五年に六六歳で没するまでの波乱万丈の生涯を綴ったものです。

この一代記を発見した師岡氏は、当初「偽書」ではないかと疑いましたが、甚太夫が関わる当時の史料を点検した結果、書かれている内容は事実であると判断しました。甚太夫は一代記のなかで、船頭として各地を巡るうちに聞いた興味深い話も記録しています。

「但馬・米屋甚助出世譚」もその一つですが、あまりにもできすぎた嘘くさい話で「作り話」ではないかと思いましたが、編者の研究で「一代記」は事実を記録しているということなので、甚助の出世譚を紹介しようと思います

と、もったい付けて差し出して娘に飲ませると、たちどころに痛みが取れて全快ということになりました。

それからはお礼の酒肴が並び、翌朝も善光寺様にお参りして帰ると、酒肴の膳が並んでいます。甚助も二五文の萬金丹でこのご馳走をと内心喜んだものの、早く帰らなければならない身。暇(いとま)を告げると、当座の礼にと一〇両が差出しされます。江戸へ来ることがあれば訪ねてほしいと書付も渡されました。

あまりの大金に固辞しましたが、ありがたく礼を受け取った甚助は、急いで船に帰り乗組員に挨拶してまわると、一〇両で〝帆待ち〟（船員が私的に品物を買って積み込むことで、密かに行うこともあるが、船主との一定の了解事項でもある）の米を買いたいと、親父に頼みました。

ところが、一〇両を手に入れた話に疑いの声があがり、ひと悶着ありますが、まあ、船が出てしまえば分かるまいということになり、買い込んだ米を大阪に着いて売ったところ倍の二〇両になりました。

給金の二両と合わせた二二両のうち、一〇両は家元に送って残りの金で江戸へ向かいます。江戸随一の料亭八百善(やおぜん)に立ち寄り、善光寺の旅人から渡された書付を見せると、店の主人は、ある屋敷を案内してくれます。そこは弾左衛門屋敷と呼ばれ、長い塀に囲まれた広大な屋敷でした。善光寺で出会った旅人は弾左衛門といい、腹痛に苦しんでいたのは彼の娘だったのです。

屋敷に上がった甚助は、下にも置かぬ大歓待を受けます。

宴もたけなわの頃、甚助は弾左衛門に千石積の船を買いたいと頼み、三千両を借り受けると八百善の手引きで船を買います。買った船に古道具を満載して大阪へ帰ると、大阪は大火の後で古道具があっという間に売れ、七百五十両で仕入れた古道具が二千五百両に。今度は木綿や反物、古着に至るまで積み込んで北海道の松前を目指して乗り出します。

途中で瀬戸湊の家に立ち寄り、親類には結城縞一反づつ、村中に手ぬぐいを配ったので、大変な出世と大騒ぎになります。甚助は大工方に二五〇両を手付にして、松前から帰ってくるまでに注文の家を建てておくようにと言いつけて旅立っていきました。

大阪は大火の後で、大阪から反物を積んで松前へ向かう船は皆無で、三千五百両の利益を上げます。それを元手に鮭の卵（筋子）やニシンの〆粕を積み大阪へ帰ると、松前物が大人気で千五百両の利益をあげ、結局、上り（上方方向）下り（北海道方向）で、一万両の利益を上げたということです。

続いて甚助は、男山・千代の友・剣菱などの灘の銘酒を積み込んで江戸へ向かいます。船員の若者にビロードの腹当てに緋ちりめんの褌、紅白に染め抜いた手ぬぐいの鉢巻きという派手ないでたちをさせ、男山一〇樽を八百



善へ、弾左衛門への手引きの礼として運び込み、その後、弾左衛門屋敷にも酒樽を運び、借用の三千両と利息三百両を合わせて返済しました。

弾左衛門は大いによろこんで、

「誠に粗末なものですが土産に、子どもたちに饅頭でも買って土産にしてください」

と、三千両を差し出しました。奥方からも子どもの〝着物の袖口〟代にと三百両が差し出されました。

そのうえ、弾左衛門からは、「何万両なりとも御入用の節は、この印形を使って為替（手形）を組んでもらって構わない」と印鑑まで貰ってしまいました。

甚助が持ってきた酒が江戸じゅうで評判になり高値で売れたため、一航海で千五百両の利益を上げ、三年で八万両の身代までにのし上がったということです。

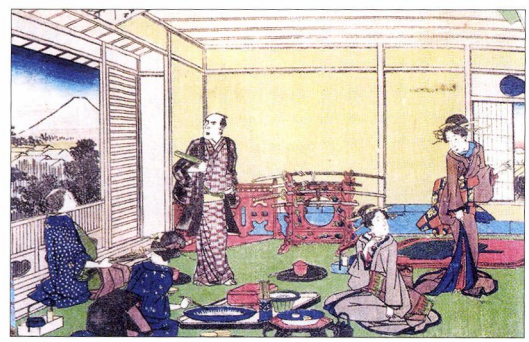
その後の甚助は、大船を四、五艘も持つような身代になり、八十余歳で天寿を全うしたということです。

＊

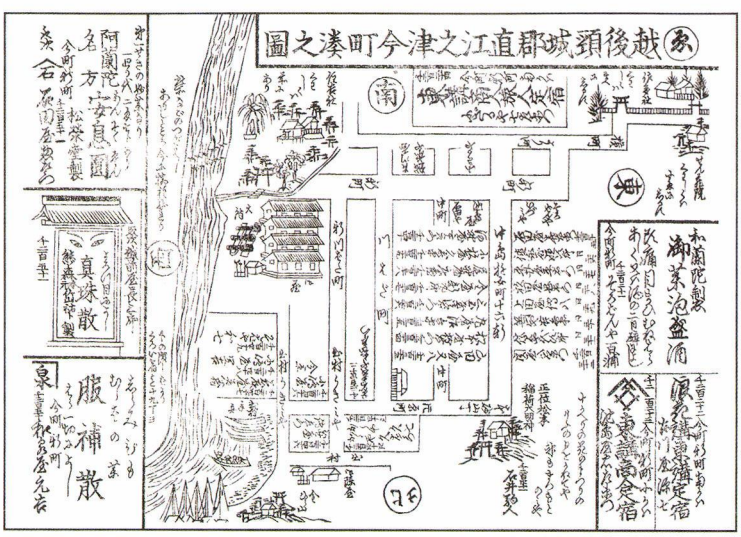
右の物語を実話だと言われても俄かに信じがたいものがあります。しかし、誇張があるにしても北前船の航海で富豪にのし上がった物語が各地に残っており、その一つとして読んでもよいのかもしれません。

また弾左衛門は通称〝浅草弾左衛門〟と呼ばれ、徳川幕府から当時の被差別的職能集団の触頭として関八州の支配を許され、浅草に旗本屋敷のような居を構えた実在の人物です。八百善は言わずと知れた江戸随一の料理屋で、多くの文人墨客が酒宴を開いたことでも知られています。越後今町の〝女郎衆〟の存在は、本誌で何度も登場した「東講商人鑑」を見ると遊郭と浮き身宿の存在が分かります。

この物語が気になった最大の理由は直江津の泉蔵院に奉納されている船絵馬です。



お大尽の饗宴
「江戸の食と暮らし」より



「東講商人鑑」今町の図
中島通りには遊郭の店が並び、河口付近には「浮き身宿」の名が見える

絵馬の文徳丸は一四反帆の四〇〇～五〇〇石船で、「但馬瀬戸米屋喜十郎」が慶応三年四月に奉納したものです。

地名が但馬国瀬戸村、米屋という屋号。名前が甚助と喜十郎の違いはありますが、代替わりして名前が違っているということも考えられます。先の「近世海運史の研究」には数軒の「米屋」という屋号が見られ、また泉蔵院に奉納されていた絵馬の古い写真をよく見ると、江戸時代から明治にかけて数枚の船絵馬が奉納されていたことが分かります。その何枚かに「但馬瀬戸村・米屋何某」という奉納者の名前がかろうじて確認できます。直江津今町・泉蔵院・但馬瀬戸村という繋がりに大変興味を覚えます。

高田寺町に移転した華園寺の鎮守社は「さんのんさん」と呼ばれた広大な境内地を持つ日吉神社であり、神社に仕えて特権を持つ日吉大社の大津神人の存在が上越市史などにも見え、廻船にかかわる特権を持っていたと言われています。



米屋喜十郎奉納の船絵馬

華園寺の塔頭の一つであった泉蔵院の鎮守社も日吉神社であり、日吉神社が衰退した後は、泉蔵院が替わって船玉信仰の寺として信仰を集め、物語の米屋甚助も直江津今町を自らの出世階段への出発の地として大切にして海上安全を祈って船絵馬を奉納し、歴代の〝米屋〟が船絵馬を奉納したと考えられないでしょうか。


泉蔵院

「直江の津」は平成13年(2001)に創刊されて以来、途中休刊はありましたが、55号を数えることが出来ました。
本号をもって終刊を迎えることになりました。長年のご愛読ありがとうございました。

制作協力・北越出版佐藤

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

最終号の発行にあたり、北越出版 佐藤様をはじめ、これまで編集に携わっていただいた全てのみなさまに感謝申し上げます。

「直江の津」は郷土の歴史や文化を後世に残す貴重な資料であり、大切な財産であると考え、バックナンバーはデジタル化をする予定ですので、これからも多くのみなさまに見ていただければ幸いです。

最後になりますが、永年にわたりご愛読いただきましてありがとうございました。

（事務局）

目　次

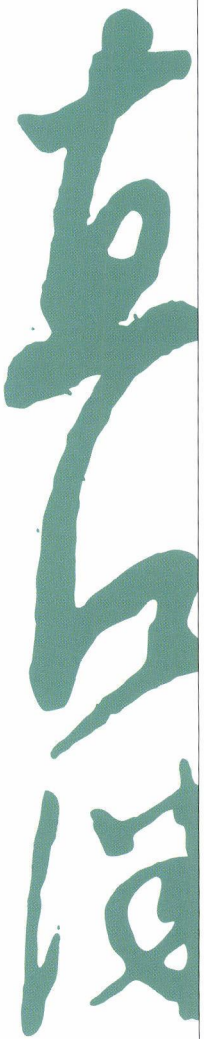
なおえつ信金倶楽部の発足と
当時の社会状況を振り返る　4
「景色」から過去・現在・未来を見渡す　16
「直江の津」51号から54号までの総目次　26
歴史は今日の手紙　27
「但馬・米屋甚助出世譚」と泉蔵院の船絵馬
巻頭エッセイ・私の直江津　2
私の直江津　上野聡美

「直江の津」
第二二巻一号　通巻五五号
発行日／令和七年一月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一－十一－一
制作協力・北越出版

2025・1号

直江の津

発行／令和七年一月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五五〇円（税込）